
東洋のキリスト教への視線

馬場 毅

東洋においてキリスト教は、外来の宗教であり、主として近代以後に受容された。ここでは、中国の状況について述べたい。

中国におけるキリスト教は、すでに前近代、異端とされたネストリウス派（景教）が唐代に都長安に伝わり、さらに世界帝国であったモンゴル帝国や元代にはカトリックも伝わった。また大航海時代以後の明末清初の時期には、カトリックの宣教師は、儒学的世界観を持つ士紳を中心とする士大夫に近づき、西洋学術を伝達する学者として見なされ、朝廷の保護も得た。しかしながらイエズス会の中国の伝統と習俗、とりわけ孔子や宗族制と関係深い祖先崇拜に配慮する布教方法は、康熙帝時代、典札問題を惹起し、ローマ教皇と中国皇帝の対立をもたらし、ついに雍正帝時代にキリスト教の布教は禁止された。

一九世紀になって、アヘン戦争以前にすでに一部の宣教師が中国に現れたが、本格的になるのは、中国の近代の始まりとなるアヘン戦争以後である。明末清初と異なるの

は、カトリックのほかに、新たにプロテスタントの布教が始まったことと、宣教師の布教方法が中国の伝統や習俗に妥協しなかったことである。さらに天津条約（一八五八年）で清朝国家が中国内地への布教の自由を認めたことにより、土地や中国の伝統的な祭礼の時の寄付金の拠出をめぐって宣教師やキリスト教徒と中国社会の争いが起きると、宣教師が自国の領事に訴え、領事が清朝の総理衙門に抗議し、総理衙門から地方の省・府・州・県の役人にまで命令が伝えられ、国家の末端の知県によりキリスト教側に有利な裁定が行われた。また宣教師は知県に対して訴えることもあり、宣教師は自己に有利なように知県が対処しなければより上位の官僚組織に訴えた。このような構造により、宣教師やキリスト教徒と中国社会との争いは、往々にして政治問題、外交問題に発展した。それとともに、清朝の行政機構を通じての宣教師やキリスト教徒側の意思の強制は、中国社会では外国キリスト教からの圧迫ととらえられた。またキリスト教を受容した層は、貧者や女性など

で、社会の指導層ではなかった。儒学的世界観を持つ社会の指導層である士紳は、宣教師が中国の伝統や習俗に妥協しなかつたこともあり、宗族社会などの伝統的価値観の擁護者として、キリスト教布教に敵対し、それに一般の民衆も呼応した。そのため各地で仇教と呼ばれる反キリスト教暴動が頻発した。その場合、特にカトリック教会が孤児を引き取り孤児院で育児をすることに對して、教会側の中国社会への極端な秘密主義も加わり、これはカトリック教会が密かに孤児を誘拐殺害し、眼球その他で薬を作るというデマが民衆に信じられ、それが暴動の原因となった。一九〇〇年に最高潮を迎えた義和団運動はこのような在地社会とキリスト教の対立の延長と各帝国主義列強の侵略の激化が呼応したため起こつたが、それは最大の反キリスト教運動という側面も持つた。

この間、宣教師やキリスト教会は、飢饉の時の救済、医療施設の経営、孤児院の経営や教会学校の経営、さらに清末清初に比べてその影響力は限定されたものであるが、自然科学や数学、その上歴史や国際法などの翻訳を通じて、西洋学術を伝達し、婦人解放運動へも貢献した。

義和団が鎮圧され、二〇世紀になると、二〇年代まで大規模な反キリスト教運動は影を潜めた。またカトリックに代わって、プロテスタントの布教活動はめざましく、初等教育、さらには燕京大学、金陵大学などの高等教育、医学

の近代化、慈善事業、飢饉救済、女性教育、反纏足運動、アヘン禁止運動、農業の科学的研究などに貢献した。またナシヨナリズムの高揚にともない、カトリックでも中国人神父の比率が高まるとともに、プロテスタント側では、一九二〇年代、本色運動が起こつた。それは外国からの影響を少なくして、財政面をふくめて中国本位の教会にならうとするもので、自養・自治・自伝の三自運動と呼ばれた。さらにこの本色運動は農村工作を重視した。またこの時期、マルクスレーニン主義的思想に基づき、非基督（キリスト）教同盟運動が起こつた。そして国民革命の進展にもなう反帝ナシヨナリズムの高揚により、天津条約以来の構造で中国社会に向き合つていたキリスト教会は、教会の土地の回収や教育権回収という反キリスト教運動に見舞われた。そしてキリスト教の普及は西洋帝国主義の侵略の一環であるというマルクスレーニン主義的言説で語られ、このような評価は中華人民共和国成立以後、最近まで続いた。